特集

全国石材施工協会・理事５名に聞く「石材施工専門業者の取り組み」

石材製品の加工割合の多くが海外に移っても「現場仕事」は海外に頼ることはできない。建墓工事を主体とした石材施工を専門とする石材業者の方たちは、業界の状況が大きく変化している今の時代に、どのようなことを考え、どのような取り組みをしているのか。今回は建墓工事を主体とする石材業者で組織する「一般社団法人全国石材施工協会」の理事を務める５名の方々を取材し「石材施工の今」についてお話をうかがった。

専門技術に磨きをかける建墓工事のスペシャリスト

神奈川県相模原市　カタノ石材㈲

月2百本の施工実績 少数精鋭のプロ集団

カタノ石材有限会社（神奈川県相模原市）の代表取締役である片野由次氏は、茨城の石材加工会社の次男として生まれ、16歳から石材業の世界に入った。最初のスタートは加工職人だったが、20歳のときに大手石材店に入り、そこで4年間、現場施工の仕事をみっちりと教えていただいたという。

「20歳からの4年間は厳しく教えていただきました。うまくできなければ『茨城に帰れ』と言われてしまうので、朝から晩まで無我夢中で作業をしていましたね。主に八王子の霊園の現場をやらせていただき、当時は休む暇もないくらい忙しい状態でした」。

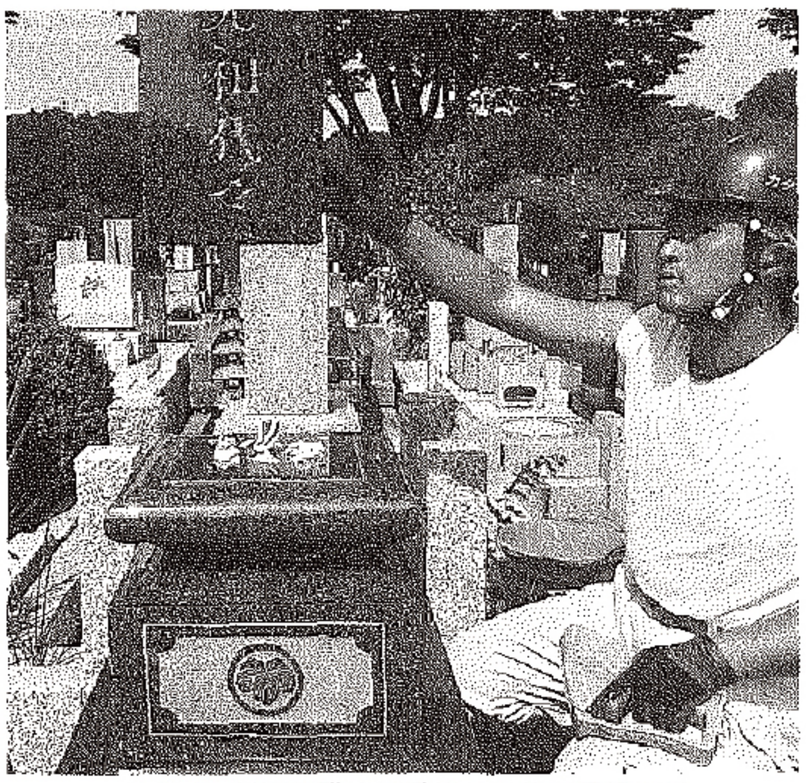
片野由次氏

その後、人手不足から一時的に実家に戻って家業の手伝いをした片野氏であるが、27歳のときに再び施工職人として戻り、昭和58年（1983年）に一人親方の個人事業主として出発、2年後の昭和60年（1985年）に今の会社を設立した。

「当初はずっと一人で仕事をしていましたね。仕事量が増えていくにしたがって職人を雇い入れ、多いときには年間で3千本のお墓を建てました。現在は8名の現場職人による3チーム体制で、月に約2百本、年間で2千2～3百本の仕事をこなしています。

当社は少数精鋭でやっていますから、職人はみんな15年以上のベテランです。オールラウンダーでありながら、とりわけ得意な分野を持つスペシャリストでもあります。据付のスピードならこの職人、コーキングならこの職人、という感じです」。

8名で月2百本ということは、土日を除いて月に20日間現場に出れるとして、1日に10本というペースだ。一人が月25本建てていることになる。


カタノ石材㈲の職人が手掛ける施工現場にて

「1日に10本というのはハイペースです。15年以上の熟練した職人が揃っていますから何とか進められていますが、経験の浅い若い職人ではこのペースにはついてこれません。もう少しゆとりのある作業をして会社の経営が成り立ち、職人の生計が立てられるようにならないと、若い人が入れる業界にはならないのではないかと思います」。

広い屋内置場を整備 商品も道具も職人も濡らさない

同社では1800㎡の土地を確保し、そこに1200㎡の屋内製品置場兼事務所を構えている。これだけの規模の設備を持っているのは、施工会社では珍しいのではないだろうか。

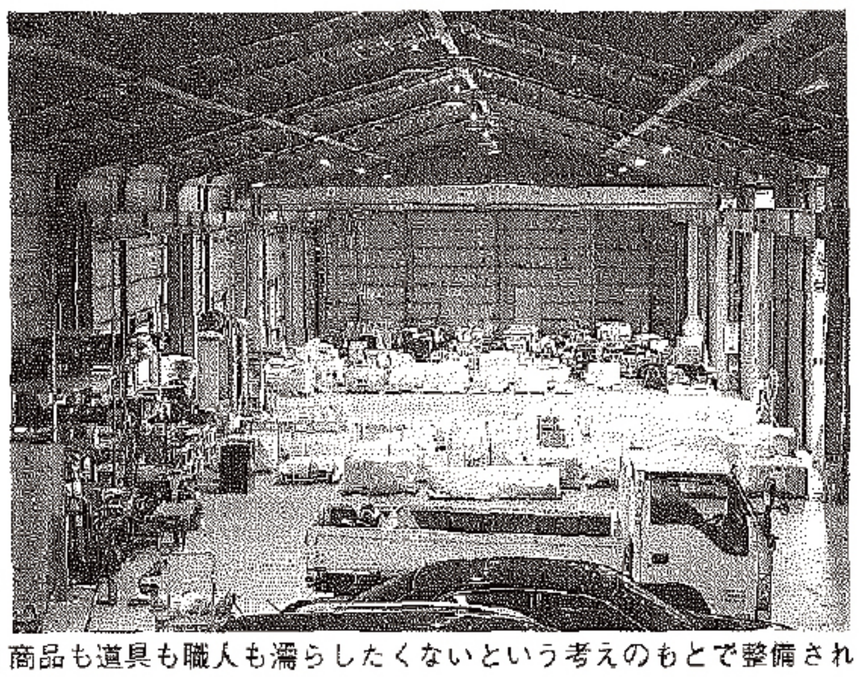
「商品を濡らしたくないですし、道具も職人も濡らしたくないという考えから、屋内型の置場を作りました。現場では組めない場合もありますから、置場で組んでから現場に持っていくこともあります」。

大手石材店との取引が大きなウェイトを占める同社では、職人を社会保険に加入させ、正規雇用している。ある石材店からは機械や職人の事前登録を求められており、人手が足りないからといって臨時に日雇い職人を使うことはできない。

「一般社団法人全国石材施工協会の多くの会員は、石材業も建設業のひとつだという認識を持っています。ですから、グレーゾーンをなくしたいと考えていますし、国のルールに則った経営をしていこうという方針です。職人の社会保険もそうですし、大規模工事を請ける場合の建設業許可や、産業廃棄物に関する収集運搬業許可についてもそうです。

法的な決まりがない建墓施工の内容については、施工標準書で業界内のコンセンサスを得ようとしています。そうした、しっかりした取り組みをしている施工会社と、そうではない施工会社とでは、当然ながら施工単価に差が出てきますが、単価の高低だけで判断されてしまうと辛いですね」。

施工自体の質と同時に施工会社の質も見て欲しいという思いが片野氏にはある。そしてその思いは「若い人が入ってくれる業界になって欲しい」という願いにつながっている。


商品も道具も職人も濡らしたくないという考えのもとで整備された大規模な屋内製品置場

今の時代に対応して若い人が憧れる魅力ある業界に

「自分は今年63歳で、昔気質の職人ですから、難しいことはわかりませんが、今の時代に求められていることに対応できなければ、遅かれ早かれ淘汰されていくだろうと考えています。

昔はまかり通っていたことが通用しなくなるのは世の常で、施工職人の雇用も墓石の解体工事も、今の時代のルールにしたがったものにしていく必要があると思います。若手職人の育成についても、丁稚奉公が当たり前だった時代と同じやり方ではダメでしょうし、普通の企業と変わらないような環境を作ってあげないと難しいでしょう」。

同社では朝5時に朝礼を始めるとのこと。この時間にスタートしなければ遠方の現場作業をこなせないことがあるためでもあるが、普通の企業のように朝8時に出社して仕事ができるようにしたいというのも片野氏の思いである。

「職人育成と技術継承の問題は施工業者だけのものではなく、採石業者や加工業者についても言えることだと思います。ですから、小売店さまも含めた業界全体でこの問題を共有して欲しいと思いますね」。

建墓工事のスペシャリストとして、これまで何万基も建立してきた同社。美しさ・強さ・速さを兼ね備えた据付工事は、新しい技術や工法の修得に力が注がれてきた結果でもある。コーキングもカートクレーンも関東ではいち早く導入してきた同社は、これからも「カタノブランド」に磨きをかけてゆくことだろう。

屋内製品置場での作業の様子